

家畜 衛生 広報

広報「家畜衛生」No.165
令和5年度号

姫路家畜保健衛生所

〒679-2166 姫路市香寺町中村 595-15
TEL (079)240-7085 FAX (079)232-2685
E-メール himejikhe@pref.hyogo.lg.jp
HP <https://www.kaho-hyogo.jp>



◎ 巻頭言	ご挨拶	1
◎ 業績発表会	第58回兵庫県家畜保健衛生業績発表会	2-5
◎ 防疫情報	令和5年度鳥インフルエンザ防疫講習会 ～今シーズンこそ発生させない～	6
◎ 疾病情報	子牛のクリプトスポリジウム症	7
◎ 管内トピックス	家畜人工授精師養成講習会を開催しました	8
◎ 新任職員紹介	新規採用職員が配属されました	8
◎ 終わりに		9



令和5年度鳥インフルエンザ防疫講習会 ～今シーズンこそ発生させない～
令和5年9月29日(金) 於 アクリエひめじ

所長 永田 圭司



晩秋を迎え、皆様方におかれましては益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

平素は、私ども家畜保健衛生所が実施して

います業務に多大なご理解、ご協力を賜り誠にありがとうございます。

新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大により不自由な生活が続きましたが、現在、アジア競技大会中国・杭州やラグビーワールドカップフランス大会など数多くの国際試合が世界各地で開催されています。また、身近なところでは、職場（姫路市香寺町）の周辺の沿道には、地区ごとに色が異なる「シデ」が飾り付けられ秋祭りの準備が進められ、私の住んでいる地域も太鼓の音や子ども達の声がどこからか聞こえてきます。

新型コロナウイルス感染症の第9波とインフルエンザの同時流行のなか、感染予防を図りながらではありますが、日常生活を取り戻せたことに喜びを感じるところです。

さて、重大家畜伝染病におきましては、昨年（たつの市）、一昨年（姫路市）と当所管内において、高病原性鳥インフルエンザが発生しました。防疫措置においては、多方面からたくさんの方々にご支援・ご協力を賜りました。改めまして感謝申し上げます。今シーズンは、10月4日に北海道で野鳥（ハシブトガラス）で初確認されるなど、既に大陸から野鳥により国内にウイルスが持ち込まれており、引き続き、細心の注意を払う必要があります。また、7月に淡路地域で発生がありました豚熱におきましては、県下のほぼ全域で野生いのししからウイルスが確認されていることから、県内で、いつ、どこで発生してもおかしくない状況が続いています。

さらに、現在、国内では発生がありませんが、海外から人やモノが活発に行き来するなかで、世界的に発生が確認され東アジアでは唯一日本と台湾だけが発生がないアフリカ豚熱や、平成

22年に宮崎県で大きな被害をもたらした口蹄疫が今後、国内での発生が危惧されているところ です。

引き続き、私ども家畜保健衛生所職員一人ひとりが緊張感をもって発生予防とまん延防止に取り組んで参ります。

一方、生産現場に目を向けますと、飼料をはじめとする生産費の高止まりによる経営の圧迫続く厳しい状況が続くなかではありますが、神戸ビーフにおきましては、生産者の日々のご努力と和牛マスター食肉センター（姫路市）が中心となって設立した輸出促進コンソーシアムや神戸肉流通推進協議会等によるPR活動により、昨年度は過去最高の78tが41カ国・地域で食されています。今後は、大阪・関西万博を控えてインバウンド需要の一層の回復が期待できる ところ です。加えて、神戸ビーフの枝肉価格が堅調に推移していることもあり、但馬牛（うし）の子牛価格は、全国的には和子牛価格が下げるなかで、83.1万円（10月）と但馬牛だけが堅調に推移しているところ です。

また、先日は、当所管内の養鶏事業者が県内ではじめて、シンガポールへ鶏卵の輸出に向け、国へ申請を行いました。当所としましてもシンガポール政府が求める農場等における衛生基準を確認するなど、輸出に向けて支援をさせていただきました。

当所では、これら取り組みを円滑にまた、加速化させるための方法の一つに、農場段階での微生物等の危害要因の防止を図る管理ポイントを設定し、継続的に監視・記録を行う「農場HACCP」の導入や、畜産物のよりよい生産工程管理の実現に向け、食品安全、環境保全、労働安全等に係る日頃の取り組みにより畜産物の持続的生産を確保する「畜産GAP」の導入を推進しています。家畜疾病対策の発生予防、生産性向上対策に取り組み、「ひょうごの畜産」の一層の発展に取り組んでいく所存でございます。引き続き、ご理解、ご協力をお願いいたし、挨拶とさせていただきます。

第 58 回兵庫県家畜保健衛生業績発表会

令和5年6月19日(月)に開催された業績発表会での当所発表演題の概要を掲載します。

「安全な畜産物供給に向けた継続的な鶏卵衛生対策」

衛生課 三木 輝美

【はじめに】

鶏肉・鶏卵等の食品を介するサルモネラ属菌による食中毒は、減少傾向にありますが例年発生が報告されています。今回、安全な畜産物供給に向けた管内採卵鶏農場の鶏卵衛生対策の取組について、菌の保有状況や血清型等の浸潤状況、伝播経路の検討ならびに野生動物等の侵入防止対策について、とりまとめました。

【農場概要】

開放平飼い鶏舎でボリスブラウンを飼育し、鳥獣侵入防止の金網やネット、車両消毒用の動力噴霧器、鶏舎入口の踏込消毒槽を設置する等一般的な衛生対策を実施していました。

【取組内容および結果】

〔サルモネラ検査〕2011年から、けん引スワブ(DS)による鶏舎環境と鶏卵、2014年から環境、鶏、飼料、敷料等を対象にサルモネラ検査を月1回実施しました。結果、環境から散発的に1~3種類の血清型が分離され、2021年には鶏舎の通路および区画のDSから *Salmonella* Typhimurium(ST)が分離されました。

〔疫学調査〕空舎時DSから菌分離は陰性でしたが、ネズミの生息状況や侵入経路を調査したところ、入雛後の鶏舎で柱周囲の金網やネットの破損、舎内のネズミの営巣、落下便、屋根板・電気コードのかじり跡が確認されました(図1)。



図1 疫学調査結果

【対策】

(1) 環境からのサルモネラ分離を踏まえ、鶏舎毎での長靴や衣類の交換や手指消毒を徹底して行いました。また、鶏や飼料からはSTは分離されなかったものの、農家の自主的な鶏卵出荷自粛、生菌剤の飼料添加、ワクチン接種済みの雛の導入等飼育方法を変更したところ、翌年度以降はSTの分離は認められませんでした。

(2) 鶏舎の破損部や飼料保管場所等に対して改善を図る等改めてネズミの侵入防止対策を指導しました。

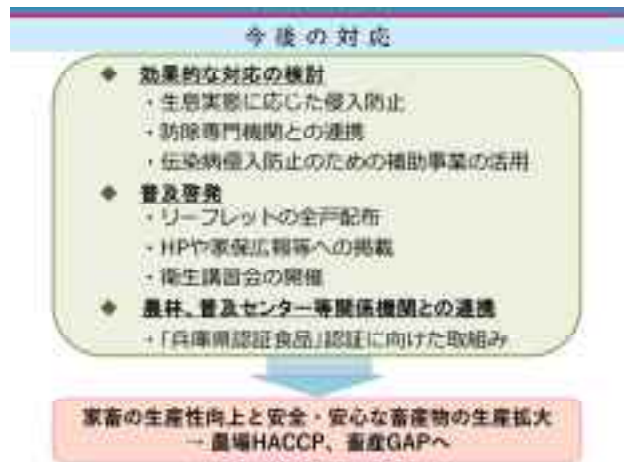


図2 今後の対応

【まとめ】

今回、環境中より食中毒の原因菌であるSTをはじめ複数の血清型のサルモネラが分離されました。通路等から分離されたこと、飼料、鶏は陰性であることからネズミ等による持込みの可能性が高いと考えられました。今後は、本調査で得られた知見を活用し、更なるネズミ侵入防止対策を図るとともに、農場のネズミ対策の重要性を啓発する衛生講習の開催により、他農場への効果波及を図っていきたく考えています(図2)。



「 物流会社の倉庫を活用した防疫資材の供給体制の構築とその運用 」

防疫第1課 山本 司

【はじめに】

高病原性鳥インフルエンザ（以下、HPAI）や豚熱等の重大家畜伝染病が発生した場合、防疫対応には防護服や医療用廃棄物容器、消石灰等の資材が大量に必要になります。これまで兵庫県では、防疫対応の初動で必要となる資材を家保や県有施設に分散保管していましたが、令和2年と3年に発生したHPAIの防疫対応では、資材の搬出に多くの家畜防疫員が割かれ、初動防疫の弊害となっていました。そこで、令和4年に物流会社に業務委託することで、資材の保管から搬出を一括して行える新体制を構築し、同年11月に発生したHPAI事例で運用することになったので、その効果を検証しました。

【新体制の構築】

物流会社は、①必要な資材の保管が可能な倉庫を保有すること、②発生農場への車両や運転手の手配が365日24時間対応できること、③県下全域へ6時間以内に資材搬出が可能であることを要件として選定しました。

物流会社の決定後、必要な資材をパレット等に品目ごとに積載し、姫路市内の倉庫に入庫しました。入庫した資材それぞれに、倉庫の配置場所を示すロケーション No.、想定する使用場所、使用するタイミングを設定した搬出資材リストを作成し、物流会社と共有しました。重大家畜伝染病が発生した際は、搬出資材リストをソートすることで、その時点で搬出すべき資材が簡単にピックアップできます。この結果を物流会社に伝えることでトラックや運転手の手配が行われ、指定した場所、時間に資材が届けられます（図1）。



図1 新体制の資材搬出の流れ

【旧体制との比較】

旧体制で防疫対応を行った令和3年度姫路市HPAI事例は、資材を搬出する家畜防疫員が不足しました。そのため、新たに資材を購入し、購入先に資材を農場に送るよう直接指示しました。その結果、殺処分前後で複数回に渡って資材が到着し、その都度、受入のため人員が割かれ、現場が混乱する一因になりました。

対して新体制を運用した令和4年度たつの市HPAI事例は、23時に倉庫に搬出を依頼、翌2時から資材が到着し始めました。必要な資材が適切なタイミングで搬入されたため、10時開始の殺処分を円滑にスタートできました。両年共に簡易検査判明時刻等がほぼ同じであるにも関わらず、新体制を運用した令和4年度は土日や夜間であっても、令和3年度に比べて初動の資材供給が迅速かつスムーズであったと言えます（図2）。



図2 資材供給実績の比較

【まとめ】

新しい資材供給体制により、旧体制と比較して家畜防疫員は初動防疫に専念でき、備蓄資材を迅速、効率的に活用することが可能になりました。

今後は多様な農場規模、続発に備えた迅速な補充体制の構築等、より柔軟に対応できるように日々、システムの改善を目指します。

「大規模養豚場における豚熱防疫訓練による実践的な防疫作業計画の見直し」

防疫第2課 増野 遊史

【はじめに】

県内では、野生イノシシにおいて豚熱の陽性確認地域が拡大しており、養豚場で豚熱発生リスクが高い状況が続いていることから、農場毎の防疫作業計画（以下、作業計画）を策定するなど、発生に備えた事前準備を進めています。このたび、県内最大規模の養豚場において、農林振興事務所、兵庫県畜産協会と共同で、県内初となる埋却候補地の試掘を含む防疫訓練を行い、実践的な作業計画の見直しを行いました。

【埋却地の検討】

農場周辺の4カ所の埋却候補地（①～④）を試掘しました（写真1）。作業は、埋却業務を委託する県建設業協会（以下、協会）の協力を得て行いました。候補地①は、地盤が硬く掘削に非常に時間を要しました。さらに、土地の横幅が狭く、重機の作業動線の確保が困難でした。候補地②は、深さ1.65mで地下水が湧出しました。これらのことから候補地①、②は、埋却地として不適と判断しました。残る候補地③、④は、岩盤がある地点や、深さ1.6mで地下水が湧出した地点が一部あるものの、十分な深さまで掘削できました。農場主の意向と、平坦な草地であることから、より安全な重機作業が可能な候補地③を埋却地に決定しました。埋却地が1カ所に絞られたことから、作業動線やレイアウトが明確になり、殺処分から埋却までの作業工程における県と協会の役割分担を整理することが可能となりました。



写真1 埋却候補地の試掘

【埋却地決定後の作業動線の確認】

試掘とあわせて埋却溝への消石灰散布やブルーシート敷きなど、掘削後の防疫作業について作業手順を確認しました（写真2）。その結果、重機作業と人力作業が混在しており、安全面に懸念があることが明らかになりました。



写真2 埋却溝へのブルーシート敷設

【作業計画への反映】

防疫訓練で明らかになった課題について、協会や農林振興事務所など関係機関と協議を重ね、①重機の作業スペースも加味した埋却溝の設計図面の作成、②重機、人力作業の割振りの見直し、③作業内容ごとの役割分担の明確化を行い、作業の安全性が向上するとともに、実効性の高い作業計画の見直しを行うことができました。

【まとめ】

埋却候補地は、地下水や岩盤の有無など、表面上では不明な点が多くあります。万が一埋却候補地での処分が困難となった場合、作業計画全体に多大な影響が生じることから、試掘の重要性は非常に高いです。今回の訓練では、埋却候補地を試掘したことにより、埋却地を決定することができました。また、関係機関の理解度の向上や、新たな課題の解決につながるなど、作業計画全体の実効性が大きく向上しました。引き続き、大規模家畜農場も含め、埋却処分を予定する農場に対し取り組みを継続していきます。

「 兵庫県における牛の核内コクシジウム症の発生状況調査 」

病性鑑定課 加地 理紗

【はじめに】

牛のコクシジウム症は *Eimeria* 属原虫（コクシジウム）が腸管に寄生することで起こる感染症です。通常は腸粘膜上皮細胞の細胞質内に寄生しますが、一方で核内に寄生する事例も報告されており、それらは特に「核内コクシジウム症」と称されています。本症は慢性下痢と発育不良を呈するとされ、生産性低下に関与するため注意が必要です。今回、慢性下痢を呈する牛で本症を確認したことから、県内の発生状況を調査しました。

【管内発生事例】

農場は黒毛和種を飼養する繁殖肥育一貫農場で、症例は5か月齢時に下痢を発症後、3か月に亘る慢性下痢とそれに伴う発育不良、消瘦、低コレステロール血症を呈したことから、当所にて病性鑑定を実施しました。解剖検査では小腸粘膜の肥厚、腸間膜リンパ節の腫大を認め、病理検査で空腸粘膜上皮細胞の核内に寄生する多数の *Eimeria* 属原虫が認められました（図）。なお、寄生虫検査については、下痢を発症した当時は糞便よりコクシジウムオーシストが検出されておりましたが(8,000 OPG)、約1か月後の再検査では検出されず、解剖時の検査でも陰性でした。

【発生状況調査】

【材料】令和3～4年度に当県で病性鑑定を実施し、腸管材料がある80農場106頭（0～11歳4か月齢）の牛を対象としました。

【方法】病理検査にて腸粘膜上皮細胞の核内に *Eimeria* 属原虫の寄生を確認した牛を選出しました。また、既報の *Eimeria* 属等を含む原虫の18S rRNA 遺伝子領域を標的とした遺伝子検査と塩基配列解析を実施し、種同定を試みました。

【結果】管内事例を含めた4農場4頭で核内に寄生する *Eimeria* 属原虫を確認しました。4頭とも異なる農場の牛で、5～6か月齢の若齢牛を中心とした県内産の黒毛和種でした。約1～3か月間に及ぶ慢性下痢と発育不良、低コレステロール血症を共通して呈し、解剖検査では、

管内事例と同様に腸管粘膜の肥厚等が確認されました。寄生部位は空腸に局限され、種同定を目的とした遺伝子検査では、4頭中1頭から特異遺伝子を検出し、塩基配列解析から本症の病原体として報告のある *Eimeria subspherica* と同定されました。当該病原体は日本国内に広く浸潤しているとされ、病原性は低いもしくは不明と報告されていますが、本病の原因として今までに8例と最も多く報告されており、今回の結果からも本病の主要な病原体と考えられました。

なお、生前に糞便からコクシジウムが検出されたのは管内事例の1頭のみで、また、治療薬としてサルファ剤を投与されるも、治療効果が認められなかった事例が1頭で確認されました。

【まとめ】

今回、県内の発生状況を調査したところ、4農場4頭で本症を確認し、うち1頭は過去にも報告のある *E. subspherica* と同定されました。

既報のとおり、若齢牛にて慢性下痢と発育不良、著しい低コレステロール血症が認められました。また、糞便からオーシストが検出されないことが多く、生前診断が困難であることも確認されました。その他、サルファ剤の効果が認められなかった事例が確認されたことから、難治性の可能性が示唆されました。様々な治療薬を検討する等、継続した検証が必要と考えます。

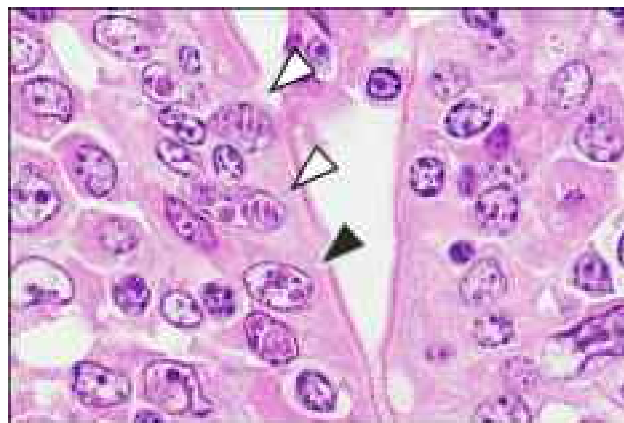


図 空腸粘膜上皮の病理組織所見（HE 染色）。核内に寄生する *Eimeria* 属原虫が多数認められる。メロント（黒矢頭）、メロゾイト（白矢頭）。

防疫第1課 石井 淳

【はじめに】

昨シーズン、国内の家きん飼養農場で確認された高病原性鳥インフルエンザ（以下HPAI）は26道県、84事例に上り、過去最多の1,771万羽が殺処分の対象となりました。兵庫県においても、令和2年の淡路市におけるHPAIの発生以降、3年連続でHPAIが発生し、甚大な被害をもたらしました。そこで、今冬のHPAIシーズンに向けて養鶏事業者及び県・市町等の関係機関が連携を図り、一丸となって今シーズンを乗り切るため、兵庫県畜産協会及び兵庫県養鶏協会と共催で、令和5年9月29日、姫路市文化コンベンションセンターアクリエひめじにおいて『令和5年度鳥インフルエンザ防疫講習会』を開催しました。本講習会では、竜野養鶏センターの中山晋吾先生、京都府中丹家畜保健衛生所の上羽智恵美先生、鳥取大学教授の山口剛士先生の3名を講師としてお招きし、最新知見と発生予防対策の習得により防疫意識の向上を図りました。

【養鶏事業者からの提言】

中山先生には、「まさか自分が！～発生から経営再開まで～」と題し、異常鶏の発見・通報から防疫措置における緊迫した状況、さらには、経営再建に向けての資金繰りや飼養衛生管理基準への対応など、ご苦勞の数々とその心境を赤裸々にご講演いただきました（写真1）。



写真1 講演中の中山晋吾先生

【指導者からの提言】

上羽先生には、「鶏舎におけるネズミの侵入経路について」と題し、ネズミの鶏舎への侵入経路や具体的な侵入防止対策をご講演いただき

ました。さらに、毒餌の設置方法や粘着シートの設置場所への固定や複数枚を連結させるなど、より効果的なネズミ駆除方法について、実際の写真や図を使用して非常に分かりやすく解説いただきました（写真2）。



写真2 上羽先生によるネズミ対策の講演

【特別講演】

山口先生には、「2022年シーズンの高病原性鳥インフルエンザ発生状況」と題し、世界のHPAIの現状や昨シーズンの国内HPAI発生の分子疫学的解析の結果を中心にご講演いただきました。また、発生予防対策として、想定される鶏舎内へのウイルス侵入経路について、養鶏場等で実際に撮影された野生動物や野鳥によるウイルス伝播の可能性を解説いただきました。

【質疑応答】

養鶏事業者から「鶏舎内のネズミも外にでるのか」、「農場周辺にカラスが集まるが捕獲すべきか」などウイルス侵入対策関連の質問のほか、「今後のHPAIワクチン接種の可能性」など、養鶏業界の方向性を問う質疑がなされるなど活発な意見交換が行われました。

【最後に】

本講習会では「今シーズンこそ発生させない！」をスローガンに、122名の養鶏事業者や県・市町関係者等が参加し、皆真剣な表情で聴講するとともに、今冬に向けての緊張感を高めることができたかと思えます。最後に、本講習会において貴重なご講演をいただきました講師先生方に深謝いたします。

子牛のクリプトスポリジウム症

病性鑑定課 齊藤 将希

【はじめに】

クリプトスポリジウム症は *Cryptosporidium* 属原虫を原因とする下痢症で、1～3週齢の子牛での感染が多い疾病です。冬季や梅雨時期の発症が多く、衛生管理失宜による寒冷ストレスや床材の水濡れなどが発症要因と考えられています。管内の発生状況として、令和5年4月から10月までに実施した糞便検査結果を集計したところ、検査牛108頭の内、21頭で *Cryptosporidium* 属原虫が検出されました。21頭とも1ヵ月齢未満の若齢牛で、A群ロタウイルスやクロストリジウム・パーフリンゲンスとの複合感染が6頭で確認されました。

【症状】

クリプトスポリジウム症は、経口摂取によりオーシスト (*Cryptosporidium* 属原虫が宿主に感染する際の形態) が子牛の腸管細胞へ感染後、黄白色～黄灰色の水様性下痢、元気消失、食欲不振、脱水などの症状を呈し、病勢が進行すると代謝性アシドーシスにより死亡に至ります。感染しても無症状な場合もあり、発症は子牛の栄養状態や他の病原体との複合感染に影響を受けると考えられています。

【対策】

農場内でクリプトスポリジウム症が発生した場合、まずは発症牛を早期隔離し、非感染牛に伝播させない対策が重要です。クリプトスポリジウム症の下痢は1週間以上持続し、免疫の弱い子牛では体内での自家感染により持続性の下痢となることもあります。また、オーシストは下痢の発現と共に糞便中に排出され、下痢が治まってからも数日間検出されます。そのため、発症牛を農場内で放置すると、オーシストを排出し続け他の牛へ感染が拡大することから、発症牛の隔離により非感染牛がオーシストと接触する機会を減少させる取り組みが必要になります。さらに、発症牛の下痢等で汚染した哺乳器具類や長靴なども感染拡大の原因となるため、定期的な消毒や長靴の洗浄・交換も重要です。

また、器具類や環境の清掃・消毒も対策の1つですが、*Cryptosporidium* 属原虫は低温湿潤下で長期間感染力を保有し、塩素などの消毒薬に抵抗性を示すため、消毒による清浄化は困難です。一方で、乾燥や熱には弱いため、消毒を実施する場合は哺乳器具類の熱湯消毒、スチームクリーナー等の熱を利用した農場内消毒、床やカウハッチへの石灰乳の塗布などが効果的とされています。

【おわりに】

クリプトスポリジウム症に対しては有効な抗生物質やワクチンはなく、脱水防止のための補液投与や二次感染対策のための抗生剤投与などの対症療法が主な治療となります。そのため、発症牛の根本的治療は難しく、感染拡大防止対策が何より重要になります。また、*Cryptosporidium* 属原虫は人にも感染し、数日続く下痢や腹痛等を起こします。牛農家の皆様におかれましては、クリプトスポリジウム症が発生した際には非感染牛への伝播を防ぐとともに、作業後はしっかり手洗い・消毒するなどし、ご自身が感染しないようお気をつけください。

【参考文献】

子牛の医学 胎子期から出生・育成期まで
発行：株式会社 緑書房
動物の感染症 第三版
発行：株式会社 近代出版



写真 石灰乳塗布による牛舎消毒

【管内トピックス】

家畜人工授精師養成講習会を開催しました

衛生課 三木 輝美



令和5年度家畜人工授精師養成講習会を7月12日から1か月にわたり、県立農業大学校にて開催しました。学科10科目、実習6科目の盛りだくさんの内容について、30名の受講生が熱心に講義を受けました。受講生からは、「繁殖だけでなく、牛のことについて勉強する良い機会になった」という声を聞きました。

乳用牛、肉用牛ともに受胎率は年々低下傾向が続いています。

繁殖成績に影響に及ぼす要因は、「牛（健康状態）」、「飼料（栄養）」、「飼育環境」そして「人（発情観察、授精技術）」など多岐にわたります。

授精手技が原因となることのないよう、講習会で学んだ基本を忘れずに、経験値を積み重ね授精のプロを目指してください。

生産現場でのご活躍を期待しています。



【新任職員紹介】

新規採用職員が配属されました



防疫第1課 坂口 実穂

今年度から姫路家畜保健衛生所の防疫第1課に配属となりました、坂口実穂（さかぐちみほ）と申します。



出身大学は鹿児島大学です。大学では組織・解剖学研究室に所属し、骨芽細胞に関する研究をしていました。大学の実習で牛に触れるうちに家畜に興味を持ち、畜産を支える仕事に就きたいと考え、兵庫県に就職しました。

今年から兵庫県に移住してきたため、兵庫の魅力を堪能するべく、休日は様々な場所にドライブに出かけています。県内は広く、地域によって特色が全く異なるので、これからたっぷりと堪能していきたいです。

家畜保健衛生所の業務について、まだまだ分からないことが多いですが、幅広い知識と技術を身につけるために精進していきたいと思えます。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

終 わ り に

高病原性鳥インフルエンザは、令和4年度シーズンでは、過去最速の10月28日に国内1例目が確認されて以来、過去最多の26道府県84事例発生し、約1,771万羽が殺処分の対象となりました。当所管内においても、昨年（たつの市）、一昨年（姫路市）と高病原性鳥インフルエンザが発生しました。消毒ポイントの設営や、防疫資材の手配、鶏の殺処分とその焼却など防疫措置において、多方面から多くの方々に大変お世話になりました。流行シーズンが長く、早期から国内にウイルスが持ち込まれており、引き続き、細心の注意を払う必要があります。

豚熱は、平成30年9月岐阜県での発生以来、20都県で計89事例発生、これまでに約36.8万頭を殺処分、本年8月には野生イノシシ及び飼育豚で確認されていなかった九州（沖縄除く）佐賀県において豚熱の感染事例が確認されました。

県内では、7月に淡路地域で発生がありましたが、県内で、いつ、どこで発生してもおかしくない状況です。豚熱には有効なワクチンが存在します。当所においても、適切なワクチン接種に加え、飼養衛生管理基準の遵守等をあらためてお願いしているところです。

高病原性鳥インフルエンザ、豚熱、口蹄疫などの重大家畜伝染病の発生時に円滑に防疫措置を行うためには、家保以外の県機関、市町、農協等多数の関係機関の協力が必要不可欠です。防疫措置にかかる期間をできるだけ短くするため、なにとぞ協力をお願いします。

副所長兼衛生課長 富田 啓介

